.hack//G.U.～リアルの二人～

緋翠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

・ｈａｃｋ／／Ｇ．Ｕ．～リアルの二人～

【Ｎコード】

Ｎ００９３Ｓ

【作者名】

緋翠

【あらすじ】

リアルで会うことになったハセヲとアトリ。その事で悩むハセヲこと三崎亮。彼はどうする

（前書き）

・ｈａｃｋ　ＧＵ　をやって書きたくなりました

はぁ、どうする俺

明日は初めてアトリとリアルで会う日なんだ

なのに……

「明日の予定まったく考えてねぇ！！」

いや、この日のためにいろんな雑誌を読んで情報は集めたんだ

だけど……

「オススメのデートスポット多すぎだろ？」

一体どれを選べばいいんだよ……

そうだ！！

こういう事はアイツが詳しそうだな……

"Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ"にログインしてみるか……

さて

「クーンのやついるかな……」

とりあえずカナードの@ＨＯＭＥに行って見るか…

って思ってドームから出ようとした瞬間

「よっハセヲ！！」

居た……

しかも都合の良いことに向こうから声掛けて来やがった

「ひっさしぶりだね～ここ最近ログインしても会ってなかったからさ～」

「なぁクーンちょっと相談があるんだけど……」

「お、お兄さんに相談か……どうせアトリちゃんの事だろう。」

なぜ分かった！？

「あぁそうだよ。」

「やっぱりな。んで、何を悩んでるんだ？」

「実は……今度アトリとリアルで会うんだが……どこに誘うかで……」

「悩んでいた……と」

「あぁ」

そういうとクーンが

うーん、難しいね

とか考え込み始める。

頼むぜクーン

今のところお前だけが頼りなんだから……

などと考えていたらクーンが

「なぁハセヲ」

「な、なんだクーン？」

「お前さんはどっか行きたい場所とか無いのか？」

行きたい場所……か

「これと行って……」

「じゃあ、どこか景色のいい場所を知ってるか？」

それなら

「幾つか……雑誌に載っていたから」

「あぁ…まぁ……そういうのも……悪いとは言わないが……雑誌に載ってるような場所じゃなくて……ハセヲ…お前だけ、もしくは地元でしか注目されないような景色のいい場所だ。」

うーん、地元でしか注目されないような景色のいい場所か……

あるか……

そんなもん

いや

待てよ

「……一つだけなら」

「なら話は早い…そこにアトリちゃんと二人で行って来い」

おぉ！

「分かった。サンキューなクーン。」

そうと分かったら

今日はログアウトして明日に備えよう

そうして俺はその日眠りについた

次の日

待ち合わせ場所にて

「アトリのやつちゃんと来るんだろうな……」

只今の時刻

９時２０分

待ち合わせ時刻は9時である

そんな感じでアトリを待っている亮であるが

（ん？）

一人の女の子に目を奪われる。

その女の子はキョロキョロしながら此方に近づいて来る

「約束の時間に遅れちゃったけど……」

どうやら彼女も誰かと約束をしているようだ

（ま、あんな可愛い女の子が一人のはず無いか…）

俺には関係無い

と思っていると

「帰っちゃったのかなぁ？ハセヲさん」

ん？

ハセヲさん？

この女！

もしかしてアトリか！？

「うぅ、ハセヲさぁ～ん」

当たり？

絶対コイツだ……

「オイ！」

「ふぇ？」

ええい！

そんな涙目で此方を見るな

「お前、アトリか？」

「ハ、ハセヲさん！？」

「あぁ。それと、まぁ知ってるだろうが…三崎亮だ。」

「あ、すみません。日下千草と言います。」

ペコリとお辞儀をしてきた。

「よろしくな千草。」

「はい亮さん。」

ニコッ

「――ッ！！／／／／」

その笑顔は

「……反則だ（ボソッ」

「え？何か言いましたか？」

「……何も。それよりもホラ」

手を差し出す亮

「え？」

「時間が惜しい。行くぞ。」

「ハイ！！」

その手を取り付いていく千草

「さて、取り敢えず……何処か行きたい場所はあるか？」

「行きたい場所……ですか？」

「あぁ」

千草に行きたい場所聞いてそこに合った場所に行こう

なんと行き当たり張ったりのデート予定か…

しかし

「私は亮さんが行きたい場所ならどこでも」

――良いですよ

と、続けようとしたが、一体止まる

「ん？どうした千草？」

急に黙って…

「あ、あの！？亮さん！！私、行ってみたい場所があるんですけど……」

「ふぅん」

「だ、ダメですか？」

シュン、と肩を落としながら聞く千草を見て

（ホントにコイツはアトリ…なんだな。）

現実でも仮想（Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ）でもホントに変わりねぇ

「何処だよ？」

「へ？」

「だから、そこは何処だよって聞いてんだ。」

「は、ハイ！！それはですね…その……さんの……」

「ん？聞こえねぇぞ。」

「――ッだから！！亮さんの家に行きたいんです！！／／／／」

俺の家？

何でまた？

まぁだけど……

「良いぞ。」

「あ、ありがとうございます。」

「まぁ今日は誰も居ないからな」

「え！！そうですか……」

なぜ落ち込む？

「ホラ、行くぞ。」

「ハイッ！！」

「ここが亮さんの家ですかぁ。おっきいですね。」

「そうか？」

てか、人ん家みて第一声がそれかよ？

「入るぞ。」

「あ、待ってくださいよ～」

そして今度は自分の部屋に

「亮さんって意外にきれい好きなんですね」

「意外に、とはなんだ意外に、とは？」

そんなに意外なのか…

すると千草はなぜかパソコンに興味を示した。

「そのパソコンがどうかしたか？」

「いえ、このパソコン使っていつも：Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ：ログインしているんですよね？」

「あぁ、そうだけど…」

「なら、このパソコンに私は感謝しなくちゃ行けませんね。」

パソコンに感謝……ね

「どうして？って顔してますね。亮さん」

「良く分かるな。」

「なんとなく…ですけど」
そこで千草は一旦言葉をきり
俺と向き合った

「私がこのパソコンに感謝しているのはですね。アトリとハセヲさん、ううん私と亮さんを合わしてくれたからなんですよ。」

「だって、亮さんがこのパソコンを使って"Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ"をやって無かったら私達……出会わなかったじゃ無いですか…だから…」

「このパソコンに感謝してるんです。」

コイツ……

そんなセリフ普通リアルで言うか？

だけど

確かに…

千草に出会えたのは‼ Ｔｈｅ Ｗｏｒｌｄ‼ をやって居たから

このパソコンが合ったから

なら

「……なら俺も」

「ん？何ですか亮さん？」

「なら俺も千草のパソコンに感謝しなきゃな。」

「え？」

「だって千草のパソコンがなけりゃ俺たちは出会わなかった…そうだろう？なら俺も感謝しなきゃな。」

「ありがとうございます／／／／」

「お前に言った訳じゃねぇんだけど……」

「それでも！！伝えたいんです…」

そこから少し沈黙が流れる

グゥ〜

「あ？」

俺の腹の虫がなった

「そう言えばもう少しでお昼ですね……何か作りましょうか？」

「マジで！？作ってくれるの？」

ちょっと意外だった。

「じゃあ冷蔵庫の中身見してもらいますね。」

そうしてリビングに行って千草は冷蔵庫を確認する

「牛肉…玉ねぎ…ニンニク……うん！これだけあれば！！」

「何を作るんだ？」

まぁ今口に出した材料で大体予想はつくけどな…

「私特製の牛丼です！！」

やっぱりか……

でもまぁ

メールで聞いた限り自分の好物だって言ってたし…

得意料理でもあるらしいから大丈夫だろう

いや…

むしろ

「楽しみだ」

「腕に寄りをかけて作りますから待っててください！」

そうして出来た牛丼はホンットに旨かった。

「なぁ千草」

「何ですか亮さん？」

二人で食器洗いをやっているなか亮は千草に声をかけた

「洗い終わったらさ、ちょっと出掛けないか？」

「良いですけど……何処にですか？」

「ちょっとな……お前に見せたい所があるんだ。」

そうして片付けを終えて
出かけることにした。

「此処って…」

「俺の家の近くの公園…なんだけど」

「私に見せたいものって何ですか？」

「ちょっとこっちに来いよ。そうすれば分かる」

そうして公園の中を移動して目的の場所に着く

「うわぁ…」

「綺麗だろ？」

「ハイッ！！凄い景色です！」

良かった。気に入ってくれたみたいだ

「此処な、雨が上がった後に来るのが本当は一番良いんだよ。」

「どうしてですか？」

「虹が見えるから」

今なら言えるかな…

千草に、

俺の気持ち…

「そうなんですか？なら今度は雨が上がった後に来ましょうよ。」

「え？」

「だって、亮さんとはこれからも会えるでしょ？」

あ、

ダメだ

「だから―！？」

千草は言葉を続けようとしたが亮に抱きしめられ止められる

「アァァァあの？亮さん？／／／／」

「千草……」

「は…ハイ」

「好きだ…」

「え？」

ハセヲの時にはなかなか言えなかった言葉

だけど

俺は自分の気持ちを言ったぞ

アトリの時とは違うお前の気持ちはどうだろうな？

だから…

「教えてくれ…」

お前の気持ちを……

「私は…」

そうすればきっと…

今より

「私も好きです…亮さんのこと」

幸せに慣れるから…

ｅｎｄ

おまけ

¨Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ¨にて

「クーン！！」

「うぉ！？どうしたハセヲ？」

「ありがとな！！おかげで上手くいったぜ！！」

「あぁ、アトリちゃんとの事ねって！？上手くいったぁ？」

「あぁ」

「どこまでだ……」

「ん？どうしたクーン？」「どこまでいったんだコノヤロー！！」

「チョッ！？どうしたクーン？」

「うるせぇこのリア充野郎が！！ヘタヲのくせして」

「ケンカ売ってんのかテメェ誰がヘタヲだ」

「あぁん！？売ってやるよコノヤロー」

そこからパイが来るまでずっとケンカをしている二人であったとさ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0093s/

.hack//G.U.〜リアルの二人〜

2011年4月24日11時36分発行